石川達三

経験的小説論・書斎の憂鬱

石川達三

経験的小説論・書斎の憂鬱

新潮社版

経験的小説論・書斎の憂鬱
石川達三作品集第二十五巻
昭和四十九年二月二十日印刷
昭和四十九年二月二十五日発行
定価 七〇〇円
著者 石川達三
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(260)一一一一
振替東京 八〇八番
印刷 大日本印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社
装画 下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1974 Tokyo
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目

次

芸術の自由　行動と反省　函館の人への手紙　傑作　孤独　悟道
事件と人物　伝統　義務の人　天才論　デフォルメ　真実　モラル
と因果　自嘲小説　執拗さ　憲法　改革　幸福　悪政　常識　自由
本能　速力　批評家　詐欺　紙幣　民主主義　ユトピア　戦争文学
作家の体力　贅沢　男性研究　文学と政治　人間の本質　作家の死
文楽私観　「凱旋門」について　漱石小感　時代の認識と反省　戦
後の文芸復興　トルストイの宗教観　宗教と共産主義に関して　勤
倹貯蓄主義について　ユネスコについて　役人嫌い　自由の有無
人道主義　時代への適応　医学と人体と政府　心の誇り　或る母の
話　愛の構図　産児制限と婦人文化　結婚の幸福とその条件　古い
生活から　婦人の位置について　百姓記　囚われた心

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蝸牛の演説　119
ずるくなれ　権利の発達　結婚式　自由の敵　色紙を書く　道路計画　無力な発言　危険人物　自動車道徳　水爆とヒューマニズム　編集者の営業　実際生活と学問　無罪の場合　神風社会　神国日本　第四の悪　アブストラクト　裁判　だれを選ぶか　相互不信　第二の敗戦　私の宝物　言論の偏向　ヒトラーの夢　第二外国語　尖端的　私の名案　多数決　不法行為　アジアの孤児　耳せん　君主の道徳　文運隆盛　国産と国民性　法律の無力　ニュース万能　社会の健康　革新女性　東京湾　公務と警棒
創作ノート・其の他　159
解決なき結末　「人間の壁」を終って　「人間の壁」ノート

私の少数意見　抄

戦後二十年　ヒロイズム　礼節　通俗投資　野次馬根性　吹原事件　茨城県笠間市長　自主性　犬養道子の手紙　共産党の大工さん　抵抗運動　患者の立場から　職業を大切に　人権擁護　飛行機の上から　戦争への接近　公害問題　自己批判　資金カンパ　儀式について　勲章について　人間ドック　癌と丹毒　サン・グラス　服装について　子供タレント　民主国家と徴兵制度　青年の跳梁　文明人の衰弱　家族制度がなくなって　礼儀知らず　速力の犠牲　混血児の問題　将来の生活　政治家の頭　完全看護　右翼　劉鄧批判　性の解放　癌を考える　科学の地獄　日蓮嫌い　幼稚園　芸術の効用　文語体への郷愁　過剰文化　大学の伝統　生殖の美　消耗性文化　学制改革案　無能な母たち　生命の尊重　農業と教育　言論の自由　共産主義の宿命　経済成長と文化　低俗文化　社会科教育　自由の

在り方　大学教育　学校の運動競技　綴り方について　白鳥文学碑
抽象音楽　横光利一　性の追求　芝居を見て　新聞小説　鷗外の
「雁」　三島君の「英霊の声」　高見順　天皇の伝記　映画の衰弱
最後の文士　現代語訳　リアリズムの衰弱　日本的文学　演技の虚
しさ　ピカソとブラック　文学全集　有馬君の作品　芸術家の個人
主義　ヴラマンク　芸術の衰亡　評価の変動　文学の輸出　小説の
位置　文学の在り方　犬について　孔子について　死について　原
罪　女は被害者　凌辱について　魔女

経験的小説論　307

流れゆく日々　抄　467

解　題　久保田正文　523

経験的小説論・書斎の憂鬱

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

書斎の憂鬱

昭和二十年～昭和二十四年

芸術の自由

法律によって芸術を裁いてはならない。芸術は人間精神の精華である。法律は世俗と時潮と野心とが結晶してつくり上げた低俗な不安定な生活基準にすぎない。この低俗をもってこの高貴を裁いてはならぬ。

すぐれた芸術作品は、それがいずれの国のものであろうとも、国際的なもの、全人類のものである。したがって一国の法律をもってこれを裁くべき筋合のものではない。一つの国家は他の世界に対して文化的な責任を負う。ナチスはトマス・マンを追放したが、彼は世界の文化人によって支持され、合衆国にむかえられている。ドイツは永遠に恥をさらした。

奈良の古都を爆撃しなかった米国の文化精神こそは貴重である。その文化精神は今日もなお占領軍に継承されている筈である。いかなる戦勝国家も芸術と芸術家とに手を触れてはならない。ローマ帝国の芸術を破壊したゲルマンの暴逆は永遠に記録されて、ヴァンダリズムという言葉をのこした。

しかし、特高警察といえども芸術を取締る意図はもっていなかった。思想取締りの手段として芸術が干渉をうけたのである。しかし芸術と、それが内包する思想とは区別できない。したがって言論取締りが行われるかぎり、芸術に自由はない。

行動と反省

果敢なる行動は、多くの場合、認識不足であることによって可能になる。軍人の勇敢さが認識不足に培われていなかったとは言えない。世の多くの行動家は彼等が不勉強なことによってその生命を支えられている。政治的自信とは政治的無反省と同義語ではないか。政治家の人間的欠陥は、その無反省の強さにある。——反省は行動をさまたげる。

函館の人への手紙

貴誌に原稿を書けとのお話でしたが、しばらく御許しを願いたい。私はいま一切の仕事からはなれて居たいと思っています。外的な事象のはげしさから離れてじっとして居たい。そして自分を静かに眺めてみたいのです。

外的事象には沢山の嘘がある。その嘘にだまされている自分を発見しようと考えています。社会の現象はいうまでもなく、みな本当です。しかしその中に本筋のものと間違いのものとがある。間違いのものが、ある時期には本当のものと同じ姿をしている。それを見分ける力がないと、私たちの足場がきまりません、私たちの心は安定しません。

政治家はその日その日の正義によって動きます。私たちは少なくとも自分の一生はつづく正義によって動かなければならない。戦争中の政府や軍部の宣伝に心服し得なかったのはその正義が短命のものであったからではないでしょうか。却って、弾圧をこうむった社会主義的な考え方が知識人の心からぬけ切れなかったというのは、その方がずっと永続する正義だったからです。

本当の文化を考え、文化を身につけようとする人たちは、永続性のある真実を自分のために発見しなければなりません。その意味から言って私は、政治家は真の文化から遠い人たちだという風に考えるのです。

新しい文化雑誌を出される由、御発展を望みます。その雑誌が時流にながされることなく、日本の永い将来のために、正しい眼と正しい反省をもって続けられんことを希望します。

傑作

芸術上の努力は、高きに登ろうとすることではなくて深みに沈もうとすることである。自分の作品が高いすぐれたものだと思うようになったとき、芸術の生命は終り堕落がはじまる。自分の作品を嫌悪し嫌悪し嫌悪して、落ちてゆく奈落の痛苦のなかから、忽然として天上の花がひらく。作者はその美花をさえも嫌悪するのだ。

したがって、傑作を書こうという意識は、作者においては邪念である。文学的努力は、名誉心とは全く相容れない。

孤独

孤独を知らない者は愛情をも知らない。真の愛情は「心貧しきもの」に与えられる。孤独なる心からうまれ出でた愛情は、祈りの心にちかづく。孤独とは「渇ける心」である。

子供が重病で死にかかっているとき、親の心は深刻な孤独に沈む。そのとき彼は最も大きな愛情を感ずる。まさに祈りである。その子が死んだとき、対象を失った愛

情はそのまま祈りの形をとる。

——芸術は孤独な心にのみ育つ。つまり「渇ける心」が芸術を発見するのだ。

悟道

漱石を読みたくなり、「猫、坊っちゃん、草枕」を読んで見る。草枕の那美さんという不思議な女性を、漱石は少しも描こうと努力していないように見える。その性格を少しも説明せず、規定しようとしない。興味ある主要人物を全く淡々となげ出して、些かも大切に扱っていない。これは面白い。また、その人物にも自分にも何等の結着をつけないで、平然と物語りを終えている。終りにならないところで筆をなげ出して知らぬ顔をしている。しきりに非人情を説いているが、全く非人情な扱いである。これは漱石の禅的悟道であるらしい。

漱石の非人情に対して里見弴はどういう態度をとっているかを見たくなり、「多情仏心」を読んでみた。多情のはてに或る崇高なものを感じてこれを仏心と呼んだのは里見流の人生哲学である。非人情とは全く別の道であるが帰着するところは意外に近い。多情のはてに一種淡淡として肉体をはなれ、個人をはなれた愛情、いわば慈悲ともいうべきものに到達しているのであるが、非人情の方ははじめから個々の人情をふりすてた果てに、別の人情、すなわち慈悲に到達している。これは慈悲というべきではなくて、漱石は悟道というかも知れない。しかし悟道が対人関係として現われれば慈悲のかたちをとるように思われる。この二作ともこだわりの無い天空海闊の心境を描いて、比較してみると甚だ面白い。

超俗の立場にたち、対内的に心境をみがいたのが漱石の悟道であり、俗に立ちまじって対外的に行動をみがいた果てが里見弴の仏心であろうか。この二作の比較、おのずから作者の人格の比較である。

事件と人物

窪川鶴次郎が曰く、現代の日本文学は人間を描かずに事件を描いてきた、そこに文学の大きな崩壊理由がある、と。この言葉はいま私の胸に痛い。私は事件を描いてきた。最初は人間を描くために事件を選んだが、後には人間よりも事件を追及してきた。そうして小説の本道をふみはずし、ふみ外すのを当然と考えてきた。いま私が創作意欲を失ったのは事件を描くことに行き詰ったのかも

知れない。事件を描くのは新聞記者だ。私は新聞記者に近づいていた。そのことに私自身の物足らなさと疲れとがあったように思う。

事件に芸術性はない。芸術は人間に即し、人間の内にのみあるのだ。その単純なことを忘れていたようである。

伝　統

秋声「あらくれ」を読み、泡鳴「耽溺」「征服被征服」を読む。これら明治大正の傑作を見て、日本文学の低さを感ずる。これらの文学には何の理想もない。この作家たちは文学に理想をもたず人生に情熱をもたず、ただ人間情痴のあとを紙とペンとを持って追いまわしているばかりだ。作家としての救いがたき怠惰、無気力を見る。花袋にして然り、荷風にしてもまた然りではないか。

努力は、無目的、無理想であるならば、むしろ労働と呼ばるべきである。吾々の努力は、理想をもち、創造の高さをめざすものでなくてはならない。彼等大作家のあとを慕うエピゴオネンが一人として大成しない所以は、彼等自身の道が行き詰りであることを示す。秋声が真に偉大なる作家であるならば、そのエピゴオネンにもまた大きな道がひらかれていなければならない。

日本の文学が、これからさき大きく育って行くものであるならば、その育つ道は決していわゆる日本文学の伝統の道ではない。ジャワの、ジョクジャカルタの王宮には愕くべき立派な、日本の能に劣らない素晴らしい舞踊劇が保存されている。しかしその演劇の伝統は決して世界の演劇文化の流れを動かすことはない。日本の能も、永遠に能として保存されているだけだ。伝統はそれだけでは一向重要視すべきものではない。われわれは日本文学の伝統を投げ捨てたところから立ち直る必要がある。

義務の人

アンドレ・ジイドが「架空のインターヴュ」の中に書いている。

（ゲエテは義務の人だった。或いは自己に対する義務の人だった）

この言葉は小説家にとってアルファでありオメガである。国家に対する義務、社会に対する義務よりも、更に重大なるものは自己に対する義務であると信じ、信じ得たところから孤独な生涯がはじまる。しかしながら此のような孤独をまもり抜いて行くためには、恐れを知らぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com